

平成 29 年度大学入門ゼミ実施報告書

○教育学部学校教育教員養成課程

1. 実施の概要

平成 29 年度の大学入門ゼミは、7 クラス編成（1 クラスあたり学生 24 名(1 クラスのみ 23 名)) で実施した。全学共通コンテンツについては 167 名を 2 クラスに分けて実施した。また平成 28 年度からの継続として、1～7 組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」(学部科目)までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む 4・5 号館 2 階にクラス番号順に並ぶよう集中配置して実施した（1 組 421・2 組 423・3 組 427・4 組 428・5 組 523・6 組 522・7 組 521）。また平成 29 年度は、「大学入門ゼミ」第 1 回授業後半にクラスのホームルーム教室に移動し、クラスごとの顔合わせ(自己紹介)などの機会を設けることとした。大学という新たな授業履修のシステムに足を踏み入れる学生の帰属集団を早期に明確にすることによって、人間関係づくり(仲間づくり)をスムーズにし、大学生活に対する心理的な不安があったとしても、その不安を相談できる仲間・教師の存在により、大学生活への円滑な移行を狙ったものである。

本学部学校教育教員養成課程における平成 29 年度「大学入門ゼミ」のスケジュールは、表 1 のとおりである。

本学部学校教育教員養成課程における「大学入門ゼミ」の特徴として、「二十四の瞳」と出会う学習を組み込んでいることを挙げることができる。事前指導の際、学生に挙手を求めたところ、「二十四の瞳」の小説を読んだことのある学生や詳しく知る学生は殆どいないようであったが、県教委のポスターやパンフレットなどに幅広く活用されたり、テレビのドキュメンタリー番組で若手教師と「二十四の瞳」との関わりが描かれたりするなど、いまだ教育ならびに教員に与える価値は大きい。本授業の一部に組み込んでいる小豆島での一日研修やその事前指導を通して、未来の教師を目指す 1 年次学生に、教師への憧れや教育への情熱を「二十四の瞳」との出会いを通して醸成させたいと考える。本活動は、地域に根ざした取り組みであると共に、地域に誇りを持って活動する学生を育成することにも繋がると考えている。

平成 28 年度、「大学入門ゼミ」の全学教員に向けた FD 授業公開を本学部教員養成課程が担った。今後の大学教育改善の方向性の 1 つである“アクティブ・ラーニング”を志向し、これまでの大学入門ゼミにおける学びを各クラスで振り返る授業回(第 13 回)を公開授業とし、学生が「大学入門ゼミ」12 回の授業における学びの成果を相互交流する学習活動場面を位置づけた。また、1～7 組の担任教員全員から授業公開への理解・積極的の協力を得ることができ、全クラス授業公開を行った。学びの成果を相互交流する学習活動場面においては、各担任教員が主体的に授業実施の工夫を行い、{ワークシート、ホワイトボード、付箋紙と模造紙、付箋紙とホワイトボード} など、個々のクラスでバリエーションのあるツールの活用と交流手法によって、学びの成果を相互交流する学習活動が実施された。平成 28 年度の FD 授業公開の成果をふまえ、平成 29 年度も引き続き、第 12・14 回の「学校訪問

振り返り」「全体まとめ」の2授業において、7クラスの担当教員全員が“アクティブ・ラーニング”を志向し、平成28年度と同様のツールを使いながらも、各クラス担当教員が主体的に授業実施の工夫を行い、個々のクラスでバリエーションのあるツールの活用と交流手法によって、学びの成果を相互交流する学習活動を実施できたことは、成果と言えよう。

表1 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」スケジュール

回	実施月日(曜日)	授業内容の概要
1	4月10日(月)	オリエンテーション・授業説明 担任紹介・領域振り分け 当初希望調査 [全体指導] 顔合わせ(自己紹介等)・委員選出 [クラス指導]
2	4月17日(月)	【共通コンテンツ①】レポートの書き方 [2分割授業]
3	4月24日(月)	学生憲章と大学生としての自覚、教育学部で高めたい力 一日研修事前指導 幼・中参観希望調査 『二十四の瞳』から考える「教育とは？」
5	4月29日(土) or 30日(日)	小豆島一日研修 「二十四の瞳」出会い学習 [7クラスを2班に分け、日帰りで実施]
6	5月08日(月)	【共通コンテンツ②】情報整理の方法 [2分割授業]
	5月15日(月)	【共通コンテンツ③】日本語技法 [2分割授業]
7	5月22日(月)	【共通コンテンツ④】プレゼンテーションの方法 [2分割授業]
8	5月29日(月)	学校参観事前指導・最終課題について
9	6月05日(月)	学校参観で学びたいことは？ (+発表への見通しを立てる) [クラス指導]
10	6月12日(月)	小学校参観
11-A	6月19日(月)	幼稚園参観 (Aグループ/Bグループの中学校参観学生は休講)
11-B	6月26日(月)	中学校参観 (Bグループ/Aグループの幼稚園参観学生は休講)
12	7月03日(月)	学校訪問振り返り・情報共有 [クラス指導]
13	7月10日(月)	学校教育入門 ・授業の基礎基本(授業のミカタ) ・言語活動と思考を大切にした授業 [全体指導]
14	7月20日(木)	全体まとめ・発表準備 [クラス指導]
15	7月24日(月)	「大学入門ゼミで学んだこと」発表・まとめ [2分割授業]

※5/17(水)13:00~14:30…図書館ガイダンスを実施(希望者のみ/先着順)

2. 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見

平成26年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいと

の希望が多かったことから、平成 27 年度から 1 か月ほど早く実施している。さらに、平成 29 年度からの全学共通科目のクォーター制への移行も視野に、共通コンテンツの中でも特に「【共通コンテンツ①】レポートの書き方」を第 2 回授業内容に位置づけるなどし、大学での学びへの潤滑な移行を促すことをねらった。

学生アンケートには「大学に入学して、レポートの書き方について無知だったので、授業の一貫としてレポートの書き方について講義があったのはありがたかった。」「特に役に立ったと思うスキル教育は、レポートの書き方に関する授業だった。大学に入り、レポート提出の機会が多くなったので、とても役に立った。」「レポートの書き方は全く知らなかったもので、大学でやっていけるか不安でした。教えてもらえてすごく良かったです。1 から細かく教えてもらった点が特に良かったです。」「大学生になるまではレポートというものを書いたことがなく、自分の思ったことや感想は書く機会が多かったが、論理的に根拠をふまえて文章を書く経験もあまりなかったので、書き方を詳しく教えてもらったのは良かったし、今後末永く役に立つと思った。」などの記述が見られ、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を培うことができたと思われる。

加えて、学生からは、「プレゼンテーションの方法の授業では、今まで行ったことがなく具体的にどうしたら相手に伝わりやすく、どのように話せばよいのかが分かった点が良かった。」「プレゼンの方法は、大学だけでなく将来でも使えることだったから。」「プレゼンテーションの方法について、高校生まではプレゼンテーションを行う機会がなかったが、大学生、社会人になるとあらゆる場面で必要とされるものである。初めは、プレゼンテーションを上手く作れずとまどうことも多かったが、この講義を受けて、ヒントをもらい、上手くつくれるようになった。将来に生きる力だと思う。」などの感想も複数寄せられた。共通コンテンツの内容を、ただ一斉講義により伝えるだけでなく、各担当教員が指導法を工夫し、「事例について実際に考えてみる」「ペアやグループごとに話し合う・伝え合う」といった演習形式を取り入れて指導した成果として捉えられるとともに、大学での学修のためだけでなく、その後の社会生活における必要感も実感として持たせる指導ができた成果と考えられる。

3. 改善すべき点等

共通コンテンツで学んだ内容が確実に一人ひとりのスキルとして身につけられているかどうか、すなわち共通コンテンツの授業効果の実際については、限られた期間での授業実施ということもあり、明確に把握することは難しい。平成 29 年度は特に第 15 回において実施した『『大学入門ゼミで学んだこと』発表・まとめ』に向けた情報整理・プレゼン作成(第 14 回)において、共通コンテンツで学んだことを活かすよう試行指導を行った。平成 30 年度も引き続き、共通コンテンツでの学びを活用し、大学入門ゼミ全体の総括として「学んだことを整理する→発表原稿にまとめる→プレゼンテーションを行う」という学習活動を含めることにより、「レポートの書き方」以外の（「レポートの書き方」については、大学入門ゼミの最終課題として課している最終レポートにおいて見取ることとしている）共

通コンテンツとして学んだことを自らの学びに実際に活かすプロセスを授業内で経験させるとともに、そのスキルが身についているかどうかについて教員側で見取することを計画している。

また、“アクティブ・ラーニング”を志向した授業についても、授業に積極的に組み入れていきたいと考えるが、一方で「やらされるアクティブ・ラーニング」とならぬよう、学生にとって必然性のある課題の吟味を続けたい。

今後とも、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性やそれらで得たスキルを活用する学びの文脈を構成するなど授業実施上の工夫を行い、学生の直近の必要性だけでなく、学生自身が「学ぶことの意味」を感じ考えられる授業として実施していきたい。

○教育学部人間発達環境課程

1. 実施の概要

教育学部の人間発達環境課程では、46名の学生を2クラスに分けて、1クラス23名の学生数で行った。担当教員は4名で、各クラス2名の教員が担任としてついた。授業の後で、何回か担任会議を実施する形で、担当教員間で情報を共有した。

学期末にグループで最終発表を行い、その途中で共通コンテンツを学ぶという形にした。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

教科書の輪読の時間がもったいないという見解が多かったので、ポイントを精選する必要がある。

またグループ活動の時間が足りないという指摘はその通りだが、共通コンテンツの内容が盛りだくさんなので、いかにそれらを効率よく教えるかを考えなくてはいけない。パワーポイントをそのまま書き写させると時間がかかるという指摘もその通りなので、そのあたりを節約してグループ活動の時間を作り出す必要がある。

レポートの書き方は早くしてほしいとの声がやはり多い。実際には、かなり早くしていて、情報整理、メールの次にレポートの書き方をもってきているが、第1回目の授業ですることとも考えたほうが良いのかもしれない。

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

今年度の合宿では、解散後に調子の悪くなった学生が出て、病院に連れていくなど急な対応の必要な場面があった。その際に、教員同士の連携がうまく取れなかったなどの反省点があげられた（携帯電話の番号は互いに共有しておくべきなど）。

2年生、3年生になるとせっかく大学入門ゼミで教えてしまったことが忘れられていることが多い。同様の指摘はこれまで繰り返されてきた。ただ、忘れるといっても全くゼロになるわけではないことから、教えていることが全く無駄になっているわけでもない。1年生で教えたことをどのようにフォローアップしていくかは、各コースでの課題であろう。

4. 成績評価の標準化指針の運用について

成績評価については、一度クラスで評価した後で、結果を教員の間で共有し、クラスの間で極端な違いが出ないように配慮した。

5. 改善すべき点等

来年から人間発達環境課程では募集停止のため、今年度が大学入門ゼミを人間発達環境課程で行う最終年度になる。いままでは学校教員養成課程とは別に初年次ゼミをやってきたが、人間発達環境課程で蓄積したノウハウなども今後、活かしていければと考えている。

○法学部

1. 実施の概要

法学部における大学入門ゼミは、8クラス開講をし（8人の教員が担当）、各クラス20人～21人程度の履修者であった。例年は学生の希望で所属を決めていたが、今年度は名簿順で振り分けを行った。共通コンテンツについては、独立で当該コンテンツを盛り込む場合や、各授業で当該コンテンツをそこでのテーマに盛り込む場合があるなど、各担当者の判断に委ねている。また、担当教員間でのやり取りについては、小澤がコーディネーター担当となっている。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

学生アンケートについては、各教員および各設問の結果に多少の差が生じているものの、概ね学生からの評価は高いものと考えられる。大人数の講義科目と一概に比較することはできないが、各担当教員の努力の成果であると考えられる。

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

共通コンテンツについては、賛否両論があるというのが現状である。賛成意見としては「基礎的なスキル修得の場としては意義のある内容である」としているのに対して、反対意見としては「予備校の授業の方が知的刺激を受けるのではないか」としている。この点については、各学部で、全学の共通コンテンツの趣旨を活かしつつ、各学部教育で求められる基礎的なスキルをどのように大学入門ゼミで身に付けて貰えるかを検討する必要性もあるように感じる（あくまでも報告者の個人的見解です）。

他方で、今年度は、「入門ゼミの配属を機械的に振り分けることとなったため、学生からも関心のある分野の教員のゼミがとれないといった不満が生じている」といった意見もあるため、振り分けについては今後どのように行うか、検討が必要と思われる。

4. 成績評価の標準化指針の運用について

成績評価データの共有や、成績評価方法について担当者間で話し合っていないものの、各教員は成績評価の標準化指針を理解した上で、評価を行っている。

○経済学部

1. 実施の概要

- ・開講数：18
- ・クラス規模：15～17人
- ・担当教員間でのやり取り：非公式的にはあったが、公式的には特になかった。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

- ・メールの書き方、レポートの書き方、プレゼンテーション方法などを学び、将来役に立つ知識やスキルをみにつけることができた。
- ・いろんな人となく良くなって楽しかった。
- ・少人数で楽しかった。
- ・メールの書き方が曖昧。
- ・日本語の技法ではなく、文章を書き方について学んだ。
- ・他のゼミは遊んだりして楽しそう。

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

- ・専門じゃないため、困っている。
- ・以前のやり方がいい。
- ・学習内容を守っているゼミとそうではないゼミがある。
- ・ゼミごとに学習内容にバラツキが生じている。

4. 成績評価の標準化指針の運用について

- ・特になし。

5. 改善すべき点等

共通のコンテンツが守られていないため、学習内容がゼミごとに異なっていた。原因として、①専門じゃない内容を教えることに限界がある、②ノートの取り方、プレゼンテーションの方法、日本語の技法などに学生はあまり興味がない、などが考えられる。各ゼミの特性を活かすべきなのか、さらに標準化を進めるべきなのか、共通コンテンツの修正などを検討する必要があると思われる。

○医学部

(1) 実施の概要

全学生数 170 名を学生に対する希望調査により 6 ゼミに分け、教員 8 名により前期全 15 コマで行った。教員アンケートは 4 名、学生用アンケートは 126 名の回答であった。

(2) 共通教育スタンダードと各ゼミのテーマの関連・対応

共通教育スタンダード

- ①21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力
- ②課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）
- ③広範な人文・社会・自然に関する知識
- ④地域に関する関心と理解力
- ⑤市民としての責任感と倫理観

クラスごとに教員の専門性により、独自の下記のテーマで授業を行った。

「健康づくりバイキング」（宮武ゼミ）

: 健康づくりのいろいろな内容・方法を理解し、自ら実践・説明・支援できるようになる。さらに課題についてグループで適切に考察・とりまとめ・プレゼンテーションを行うことにより共通教育スタンダード②に対応

「国際保健学の基礎」（依田ゼミ）

: 世界の人々の健康問題に関して、「皆健康に生活できるように」をキーワードとして、グループで問題を考え共同作業を行うことにより共通教育スタンダード①に対応

「医療分野での X 線と放射線」（久富ゼミ）

: 学生が自ら能動的に医学分野における放射線に関連する資料を調べ、試行錯誤や議論を行う。資料をもとに課題解決能力を身につけることにより共通教育スタンダード②に対応

「生物多様性と実験医学」（宮下ゼミ）

: 生命科学関連の課題発見に関して学生が自ら能動的に取り組み、グループで課題を考えプレゼンテーションを行うことにより、共通教育スタンダード①②に対応

「患者との対話から学ぶこと」（峠・石上ゼミ）

: 文献検索、プレゼンテーション技術、レポート作成方法、医療者として患者との接

し方、患者を取り巻く医療や保健制度についての知識を身につけることにより、共通教育スタンダード①②③に対応

「対人援助職に求められるスキル」(清水・越田ゼミ)

: 倫理的態度・大学履修上のマナーおよび基本的学習スキルの習得、対話的コミュニケーションの体験により、共通教育スタンダード①②⑤に対応

(3) 上記の内容についての実施形態

全学共通コンテンツに関しては、ゼミ担当各教員の判断により、シラバスに従い学生主体（グループワーク、学生によるプレゼンテーション等）のゼミが行われた。

各々のゼミにおいて、

- ・概ね大学入門ゼミハンドブックに記載通りの方法で授業を進行した。
- ・全学共通コンテンツの内容が結構充実しており、各講義の合間に行うには時間がかかるため、講義予定を変更してそのために1コマ使用した（来年度実施するのであれば2コマ程度時間を用意しておく）。
- ・配布されたコンテンツを、必要なものだけ抜粋して使用した。
- ・4、5名ごとに分けて班ごとに発表・議論等をおこなっている。プレゼンテーションに関しては、講義日の調整を行い、日程の終盤でプレゼンテーションの演習をグループ単位で行った。グループワークの各手法についても解説を行った。
等の対応を取った。

(4) 全学共通コンテンツの部分の評価方法について

それぞれのゼミでシラバスに従い、教員の判断により成績評価の評価を行った。

2. 学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての概観

(1) 評価の高かった点

大学入門ゼミについては、スキルの取得、グループワークの意義について学生の評価は基本的には高い。特に「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」の全てに関して、必要性が高いとの意見が多かった（以下、意見の要約）。

「プレゼンテーションの方法」

- ・グループワークによりプレゼンの準備をし、発表したことで、構成の仕方、発表の仕方を学べたことが良かった。
- ・PowerPointの使い方を学ぶことができた。
- ・他の人・他の班の発表・反省が参考になった。

- ・話し方なども学ぶことができた。
- ・大切なところを強調する方法や、数字や図などの有効的な活用方法を学ぶことができた。
- ・先生の毎回授業のプレゼンが第一の見本になった。毎回の講義から得られることも多かった。
- ・問題解決に向けて、スキのない考察を行う必要性が理解できた。
- ・プレゼンテーションをしたあとに内容だけでなくプレゼンのしかたまでアドバイスももらったのが今後の参考になって良かった。
- ・特にプレゼンテーションの内容がテーマに合っているかという点が重要だということがわかった。

「レポートの書き方」

- ・授業の最初に教えてもらったので、書き方を知ることができ、他の授業においても活かせることができた。
- ・レポートと感想文のちがいについて理解でき、論理的展開が必要であることを強く意識できるようになった。
- ・情報源を細かく示す引用の仕方などを知ることができた。
(例) カンボジアの健康問題の例を考えることで、現実味のある問題抽出、解決案提示が出来た
(依田ゼミ)。
- ・特に引用を行う際の表現方法についてレジユメを使って詳しく説明があったので、レポート課題を、レジユメを参照して書くことができる。
- ・引用をする時の注意事項が剽窃としないようにするために重要でよかった。
- ・引用の方法など、医学論文だけ異なる書き方をする点もあるので気をつけたい。
- ・毎回、小レポートを作成するという課題が課されていたので、短く自分の意見をまとめるという力を身につけることができた。

「情報整理の方法」

- ・国際保健の内容は特に問題点などが複雑に関わり合っているので、うまく情報整理することが重要となっており、それを学べたと思う (依田ゼミ)。
- ・集めた情報や資料を整理することで、自分も受け手も理解しやすくなることが分かった。
- ・毎回の授業で様々な内容を学習するため、頭の中で情報整理する必要があった。何に焦点を絞って整理していくのかで、情報の整理の仕方は変わってくるのが分かって良かった。
- ・3分クッキングを用いて情報整理をするなどの授業が楽しかった。実用的だったと思う。

「日本語技法」

- ・メールの書き方、レポートの書き方、陥りやすい日本語技法のまちがいなどが学べた。
- ・メールの書き方を知れた。コーチングフローについて知れた。コミュニケーション能力のポイントを学べた。人前で話す経験を多くできた。(清水、越田ゼミ)
- ・目上の人へのメールの作成の授業が一番役に立った。今後、大人の社会と接点を持つて行く上で補強されるべきだから有意義だった。
- ・患者さんと話す際に役立てられそうだったし、その話術を使えば、自分の考えも整理できると分かったから。(清水、越田ゼミ)
- ・特にコーチングなどのコミュニケーションに対してのスキルを知ることができた。(清水、越田ゼミ)

「その他」

- ・医学科一年にとっては唯一とっていいくらい医学を学べる授業で有意義であった。(宮武ゼミ)
- ・自分の気になる分野について聞ける点。(依田ゼミ)
- ・病棟で直接患者さんの話を聞いたことが良かった。(峠、石上ゼミ)
- ・普段あまり接することのない医学科の学生と授業を受けることができたので、医学科の子がどのような考え方をしているのかを知ることができ大変勉強になった。着眼点が私とは違い新鮮だった。(依田ゼミ)
- ・水曜1限に医大キャンパスに間に合うよう努力することの大切さを学ぶことができたこと。(宮下ゼミ)
- ・医療人を志す我々にとって有意義な内容で、医療に携わる上で必要な能力をえられた。(清水、越田ゼミ)
- ・全てが大学生及び卒業後の職業において必須のスキルであり、常識である。大きな失敗をしたり、恥をかいたりする前にこれらのことを学べることは非常に喜ばしい。また、カウンセリングやコーチング、ファシリテーションなどの具体的な技法については未習だったので、学べた意義は大きい。
- ・ロールプレイがとても楽しく、感じやすくて分かりやすかったし、とても面白い授業でした。(清水、越田ゼミ)

(2) 改善すべき点

以下の意見が出ていた (要約)

- ・「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」「情報整理の方法」それぞれの時

間が少なく、より詳しい説明が必要である。

- ・「レポートの書き方」で実際にレポートの課題が出たが、具体的な良否がよくわからない。自ら調べて完成させるような課題を出してほしい。実際に、ミニレポートでWordを使って提出するという宿題があってもいい。
- ・各ゼミで授業進度や、出席の厳密さなどに違いがありすぎる。内容が異なっている、形式はできるだけ統一してほしい。
- ・プレゼンテーションの準備の時間が短いので、グループ（班）のメンバーが授業時間外に時間を割くのが大変であった。
- ・授業時間中にプレゼン用の PowerPoint のデータを作る時間をとった方がよい。
- ・詳細なワークシートが欲しい。
- ・資料を作る時間や考える時間が、班によって違うので、そこを改善してほしい。
- ・最終レポートの提出期間が短く、テスト期間ともかぶった。
- ・学生たちに意欲が足りない、それを引き出すためにも学習目的や課題などを明確にした方がよい。
- ・プレゼンテーションの方法…順序立てて、効果的に提示するには、どうすればよいか教実際にあつたメールやレポートを見せながら改善する点や良い点を示してほしいと思った。
- ・医学科・看護学科の交流がない。
- ・わざわざグループ分けする必要がない。スキル習得が目標なら全体でやっていいと思う。

3. 教員アンケート結果（担当教員からのコメント）からの改善すべき点等

- ・学生への配布資料や具体的なアドバイスなどについて、もう少し資料があるとなお良かった。具体例や文章等がもっと充実していても良いし、実際印刷して学生へ配布するひな形のようなものも充実させてもらえるとなお良い。
- ・開講日時が選べないのが一番つらかった（このために他の予定を全て変更せざるを得ず、非常に不便であった）医学部の講義予定から、仕方がないことではあるが、そこが柔軟になると大変助かる。
- ・内容の統一のためには、全学で共通の DVD 等を作成していただくとありがたい。
- ・医学科と看護学科合同のため、レベル設定に苦労した。学力、内容理解に差があるので、レベル設定に自分自身の工夫が必要と思われる。
- ・「大学入門ゼミハンドブック」
レポートの書き方の[ワーク 2]「消費税増税について 100 字程度」の例は少し古い。
教員へのメールの書き方は、ここまでの説明は必要ない。
など、改善すべき点がある。
- ・単に講義や 1 回だけの練習だけでは（スキルが）身につかない。

- ・最初の全学共通コンテンツと後の個々の教員の講義のつながりがない。講義の流れとして違和感をおぼえる。また、大学入門ゼミは、情報整理の訪欧、レポートの書き方、日本語技法、プレゼンテーションの方法の教育が目標の一つであるが、大学入門ゼミの講義の目的とは異なっており、この点で、学生に誤解が生じているので改善してほしい。例えば、上記4つのコンテンツを教える講義を作って全員を教えるなど。また、アンケートで教員へのコメントで、教員を中傷するものがあり、名前を記載させたほうが良い。
- ・医学部の場合、各教員の専門性の高い授業との組み合わせで「全学共通コンテンツ」を教えているが、「全学共通コンテンツ」に関して質的に高くかつ密度の濃い授業を行うためには、時間的制約が厳しい（専門の講義・演習内容との調整が難しい）。
- ・グループワークの場合、学生の能力・意欲の差が大きく、かならずしも効果的でない点もあった。
- ・各全学共通コンテンツの導入部分、あるいは座学で済む内容については、e-learningにしたほうが、「全学共通」としての内容が保証できる。

4. 成績評価の標準化指針の運用について

昨年度の成績評価データについては、昨年度の担当者間で共有を行った。

医学部における成績評価については、「香川大学医学部成績評価に関する申合せについて」（医学部学務委員会）が平成28年4月より適用されている。

○工学部

1. 実施の概要

開講数は12クラス，担当者は12名，1クラスは20名程度です．学科ごとのガイダンスが1回，高松

南警察署の方による安全講習，保健管理センターの高田先生による大学生生活講習をそれぞれ1回実施し，残りの12回はそれぞれの学科単位で実施した．多くの学科で共通コンテンツを用いている．

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

一定の効果があつたと感じる部分もあるが，効果がないと思われるところや学生が苦痛に感じている部分もあつたようである．今後も1科目として開講するのであれば更なる工夫が必要だと思われる．

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

効果が全くないわけではないが，1科目として本当に実施する必要があるかどうかを疑問に思う教員がいたことは間違いない，検討が必要であると思う．

4. 成績評価の標準化指針の運用について

著しくクラスごとに差がでないように担当教員間で情報共有をお願いした．

5. 改善すべき点等

学生向けと教員向けでそれぞれ別のもので作成すべきとの意見があつた．また内容についても過剰であるという指摘もあつた．

○農学部

1. 実施の概要

全16回のうち、実習2回(合宿、図書館)、講義14回、担当者6名、学生各25-26名を学籍番号で機械的にクラス割り当てを行った。共通コンテンツの教え方は特に取り決めはないが、各コンテンツと研究倫理を取り入れるように打ち合わせを行った。また、不明の点については部会委員が窓口となりその都度対応に当たった。成績の評価については、メール審議とした。

2. 学生アンケート(共通コンテンツについてのアンケート)結果についての所見
全体的に高評価であった。

1、スキル評価

共通コンテンツが役に立ったとの評価であった

2、スキル改善

あらかじめ教員間で内容を統一するほうが良いか?

3、そのほか意見

講義を選びたかったという意見が多く来年度は要検討

3. 教員アンケート結果(または反省会での意見交換)についての所見

1、共通コンテンツについて

専門でないので教え方が難しい。学ぶべき内容が多く有意。予習復習を促しては。

2、工夫、反省

プレゼンをやさしく教えること。アイコンタクトをとる。実験系の内容を充実。

3、ハンドブックについて

高評価

4、教育効果

目的がはっきりしない。FD研修を実施してほしい。反復が必要。

5、改善点

もう少し少人数でもよいのでは?

4. 成績評価の標準化指針の運用について

昨年度の成績データを示し、農学部ではこの程度の成績が基準になることを示した。また、メールで意見交換をした。来年度は、ルーブリックに近い取り組みをしたいと考えている。

5. 改善すべき点等

FD研修が必要であると感じた。また、担当者間で事前に集まって意見交換をする。事務的に可能であれば、来年度は担当の先生を学生が選べるように変更したい。(元に戻す)